

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 7 日現在

機関番号：54601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25871045

研究課題名(和文) オーラル・ヒストリーによる別子銅山山間部社宅街の生活史・労働史調査

研究課題名(英文) A Study of Life History and Labour History of a Copper-Mining Town in Bessi, Japan Using the Oral History Method

研究代表者

竹原 信也 (Takehara, Shinya)

奈良工業高等専門学校・その他部局等・講師

研究者番号：10511545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：別子銅山の山間部社宅街の生活について居住経験者に鉱山労働や生活について聞き取り調査を行った。また別子銅山に関する鉱山実習報文を閲覧し、明治～昭和における鉱山労働と社宅での生活に関する資料を収集した。また大正期に組織された改善会が1927-1939年の間に発行した雑誌「改善」の閲覧複写を行い、大正末期から昭和初期にかけての社宅街での人々の生活の様子について文献資料を収集した。研究の成果を論文や学会にて発表した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I examined life history and labour history of a copper-mining town in Bessi, Niihama City, Japan using the oral history method. First, I interviewed former residents about their life history in a copper-mining town and labour history in Bessi Copper-Mine. Second, in order to collect descriptions regarding their life, I investigated students' reports of Mining and Metallurgy Departments, University, and also, I accessed to old magazines called "Kaizen", which were published in 1927-1939 by a laborer group, Kaizenkai", that was virtually organized by corporation.

研究分野：法学

キーワード：山間部社宅街 生活史 オーラル・ヒストリー 労働史 改善運動 鉱山実習報文

1. 研究開始当初の背景

明治以降における鉱山や炭坑の社宅街の形成は、企業家の博愛精神、企業の合理性の精神、労務管理や福利厚生といった、従来の鉱山集落とは明らかに異なる思想が反映されている。

それ故、社宅街は計画的に整備され、病院や学校、娯楽場等多くの福利厚生施設が建設された。これまで社宅街は劣悪な住環境として捉えられることが多かったが、むしろ、住環境の改善に先進的に取り組むケースが多かったという。

このような社宅街の展開は近代的な労務管理の導入という目的を含んでいた為、これまで培われていた鉱山における伝統的な労使関係の変容をもたらした。そして、この変容は、社宅街の人々の営み、生活にも影響を与えたと考えることができる。

こうしてみると社宅街研究は近代日本の住宅地を考える上で、きわめて興味深い示唆をあたえるのである(社宅研究会編著『社宅街 企業が育んだ住宅地』学芸出版社(2009))。

しかし、これまでの研究手法は鉱山実習報文や建築物調査をもとにしたもの、伝統的な労使関係の調査や日本の労使関係の特徴を明らかにすることを目的とした研究が中心であり、近代的な社宅街に於いて労働者とその家族が実際にどのような生活をしてきたのか、生活者の視点や公共的な役割を果たす倶楽部や浴場、自治会、子ども会の機能については重視されてこなかった。

社宅街は、「企業やその産業の副次的なもの」として捉えられがちであるため、企業による社史編纂でもほとんど扱われていない。また、全国の鉱山・炭鉱が閉鎖されていく中で、多くの社宅街は消滅している。さらには実際に生活経験者も高齢化が進んでいる。このような状況において、「近代日本の住宅地という空間が持ち得た普遍的な特質」(社宅研究会、2009)を明らかにする上で生活者の視点を導入し、居住経験者の口述史を記録し、整理していくことは重要である。

2. 研究の目的

本研究は、明治期以降に進められた鉱山の近代化によってつくられた別子銅山の山間部社宅街(鹿森社宅・東平地域)の生活について、オーラル・ヒストリーの手法を用いて、居住経験者の語りを記録するとともに、改善会の雑誌「改善」や旧帝国大学保有「実習報文」の分析を行うことで、山間部社宅街の生活や労働の様相を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 聞き取り調査

別子銅山の山間部に存在した社宅(鹿森社宅・東平地域)の生活経験者にライフストーリーインタビューを実施する。インタビューは録音(可能な限り録画も)し、逐語記録を作成する。

逐語記録をもとに社宅街の生活空間の分析を行う。例えば、これまでの鹿森社宅の調査により、公的な記録以外にも、個人商店がありタバコや酒、肉類を販売していたこと、豆腐屋があったこと、理髪店が男性の娯楽場としても機能していたことが明らかになっている。インタビュー調査を進め、詳細な生活空間の把握に努める。また、インタビュー調査の際に、個人が所有する、写真・日記・手紙についても閲覧・複写を行う。

(2) 改善会「改善」の分析

別子銅山の労働者の生活には、戦前の生活改善運動の影響が見られる。大正15年(1926)に別子鉱業所支配人となった鷲尾勘解治は、労働者の「善導」を目的とした修養団体「自彊舎(じきょうしゃ)」を開き、教育に勤めた。また、生活改善運動にも、積極的に取り組んだ。

新居浜市立別子銅山記念図書館には、鷲尾の影響のもとつくられた改善会が1927～1939年まで発行した雑誌「改善」の1～14巻が所収されている。雑誌を散見する限り、鷲尾は、大正末期の労働運動を激しく非難し、近代国家としての「日本」「国民」といったイデオロギーを展開、「質実剛健な国民精神」の涵養を訴える。そして、そのための積極的な生活の「改善」を奨励しているのである。例えば、自発的な奉仕活動「作務」や、節約・貯金、精神と肉体向上のための相撲やスポーツ、安全標語の募集などである。

この改善運動の影響は戦後も社宅街の人々の暮らしに大きな影響を及ぼしていると推認できる。そのため、本研究においては、この生活改善運動の影響を調査する。

(3) 旧帝国大学保有「実習報文」の分析

(社宅研究会、2009)及び社宅研究会の池上・砂本・中江・角「旧帝国大学採鉱・冶金系学科「実習報文」一覧(1879-1950年)」九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料(2007)によると「鉱山実習とは、旧帝国大学(以下、帝大)や工手学校など、高等教育機関の採鉱(あるいは鉱山)・冶金学科の学生が主に夏期休暇を利用し、各自割当てられた鉱山や精錬工場などで生産システムを体得する現地実習である。また、旧帝大所蔵の「実習報文」とは、大学から派遣された実習生が、実習期間中に収集した採掘法や換気法、坑内外の図面などの資料や各種データを整理し、大学に提出した報告書のことである。この報告書は卒業論文に準じるものとして製本され、保管されている。」

実習報文という資料の特異性と有益性を強調する。すなわち、高等教育機関による長期的な観察を可能すること、外から社宅街を客観視・俯瞰出来ること、そして記述する学生によって視点や書き方がバラバラであり、だからこそ、社宅街の豊かな街の表情を生き生きと映し出すことである。本研究では、この文献資料を、社宅街の生活空間を把握する上で重要な資料と位置づける。そこで、明

治・大正期に別子銅山を調査した実習報文が北海道大学、東京大学、大阪大学、京都大学、九州工業大学の付属図書館に所収されている。この点、可能な限り、実習報文を閲覧・複写する。

4. 研究成果

(1) 別子銅山の山間部社宅街(鹿森社宅、東平地域)の生活について居住経験者14名に鉱山労働や生活について聞き取り調査を行い、逐語記録を作成した。

労働史としては、地質課、運搬夫、警備係の仕事に従事した人より仕事の内容や坑内の様子について聞き取りを行うことができた。

社宅コミュニティの様相としては、鹿森社宅について生協の設立から運営まで携わった元自治会長より生協の設立の経緯や運営、また自治会について聞き取りを行うことができた。また子供会の運営経験者からも、子供会の行事や社宅の様子について聞き取りを行うことができた。

次に集会所として機能していたクラブや隣接する公共浴場、幼稚園、生活物品の運搬に用いられる索道の管理についても聞き取り調査を行った。さらには実際に幼稚園で働いていた女性からも聞き取りを行った。

個人商店や理髪店、魚の行商、定期的に開催される出店については生活経験者から聞き取りを行い、詳細な生活空間を把握することができた。併せて個人保有の写真資料を収集した。研究の成果を論文にし、学会にて発表した。

(2) 新居浜市立別子銅山記念図書館所収の改善会発行の雑誌「改善」の1~14巻を閲覧し、必要部分については複写も行った。

内容については「宣言文」や「巻頭言」、「勅語」で国家への奉仕や改善運動など労働者が持つべき考え方、規範が説かれていた。

「善行美談」では模範的な行為が紹介され、「懸賞論文」で労働者が書いた文章・主張が紹介されていた。また「支部通信」でも各支部の奉仕活動や作務が報告され、積極的な奉仕活動が奨励されていた。

「家庭欄」のコーナーでは、いわゆる応急手当や生活習慣、日常の食事に関するまで細かな生活改善の方法が紹介されていた。

しかし、昭和年代に入ると次第に戦時中を意識した内容が色濃くなり、主義主張が一貫した雑誌というよりも時期的に変遷していることがわかった。

これらにより大正末期から昭和初期にかけての社宅街での人々の生活の様子について貴重な文献資料を入手することが出来た。

ただし、文書量が大きく網羅的な整理、本格的な内容の分析とそれらを踏まえた総合的な解釈には至らず、課題が残った。しかし、これから本格的な分析と検討を加えていくことで、聞き取り調査では明かにすることができない伝統的な労使関係が変容し、鉱夫が

労働者として企業内の労務管理に取り込まれていくプロセス、大正・昭和初期の社宅街の生活やさらには生活改善の様相についてより詳細に把握することができるであろう。

(3) 今回の調査では東京大学、京都大学、北海道大学、九州大学に保管されている別子銅山に関する鉱山実習報文を閲覧し、明治～昭和における鉱山労働の詳細な内容や労務管理の実態、社宅での生活に関する資料を収集することが出来た。ただし、大阪大学、北九州工業大学に所収されている別子銅山に関する鉱山実習報文については閲覧・複写を行うことができなかった。またこれらの大学以外にも、別子銅山に関する鉱山実習報文は存在すると考えることができ、今後の課題としたい。

鉱山実習の多くは記述の順序が定型であった。すなわち、最初に別子銅山の「地理及沿革」、「地質と鉱床」の概要が説明される。続いて、「測量」「探鉱」「開坑」「採鉱」「坑内構造」「運搬」「排水」「通気及照明」「坑外設備及鉱山動力」「選鉱」等の章において地質調査から採鉱、運搬、精製まで一連の作業内容の詳細が報告されている。また「鉱山組織及鉱業費」で組織体系や労働者数、賃金や雇用関係について報告がなされている。

このうち、「地理及沿革」において別子銅山の社宅街の数や種類、名称、人口などが整理されている。また社宅の種類労働者の性格や風土の特徴に関する記述や社宅内の福利厚生施設、金融機関、教育施設、警察についての記述がみられるものもあった。そして企業内で活動あるいは関係する諸団体、たとえば住友豫州親友会、自彊舎、改善会、在郷軍人団、青年団といった団体について紹介・記述するものもあった。

次に「鉱山組織及鉱業費」においては、上述の通り組織体系や労働者数、雇用関係について報告がなされている。労働者扶助や雇用の規則も報告され、当時の雇用関係に関する貴重な資料を入手することができた。

研究の成果は学会にて発表した。ただし、文書量が大きく網羅的な整理、本格的な内容の分析とそれらを踏まえた解釈には至らず、課題が残った。

しかし、これから本格的な分析と検討を加えていくことで、聞き取り調査では明かにすることができない明治・大正・昭和初期の社宅街の生活や鉱山労働の様相や労務管理の実態により詳細に把握することができるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 竹原信也 山間部社宅街のオーラル・ヒストリー 奈良工業高等専門学校研究紀要第49巻、2014、pp. 40-48、査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 竹原信也 別子銅山社宅街における昭和の生活史 日本オーラル・ヒストリー学会第 12 回大会 2014 年 9 月 7 日、日本大学
- ② 竹原信也 旧帝国大学実習報文の分析からみた山間部社宅街の様相 日本法社会学会、2014 年 5 月 10 日、大阪大学
- ③ 竹原信也 生活史・労働史からみる山間部社宅街の特性、日本法社会学会 2013 年 5 月 11 日、青山学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹原 信也 (TAKEHARA SHNYA)

奈良工業高等専門学校・一般教科・講師

研究者番号：10511545